

ロシアの通貨バスケット制

～ユーロのバスケット・ウエイト引き上げで生じるドル安・ユーロ高圧力～

2006年4月27日(木)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

～ 要 旨 ～

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

旧ソ連崩壊以降、ロシアは通貨ルーブルを一定の範囲でドルに連動させる為替制度を採用していたが、最近になって様々な弊害が出てきたため、2005年2月にユーロとドルの2通貨で構成する通貨バスケット制に移行した。

米ドル連動制の維持が困難になった最大の理由は、2002年から2004年にかけての急激なドル安・ユーロ高の進行である。米ドルに連動する為替システムのもとで、ドル安・ユーロ高が進むと、ルーブルの価値もユーロに対して下落する。ルーブルの対ユーロでの下落は、貿易面でマイナスの影響を及ぼしている。ロシアの貿易総額に占める各国の割合をみると、EU(欧州連合)加盟国が53.9%と過半を超える。一方、米国のシェアはわずか4.3%に過ぎない。しかも、ロシアは各国との貿易取引において、主力の一次産品の輸出は大半がドル建て、輸入はもっぱらユーロ建てによって行っている。このためルーブルがドルに対して上昇、ユーロに対して下落すると、ルーブルに換算した際の輸出代金が目減りする一方、輸入代金の負担が増加、ネットの貿易黒字額が縮小してしまう。また、ユーロ高・ルーブル安の進行は、輸入物価の上昇を通じてロシア国内のインフレ圧力を強めることにもなる。

中央銀行は、通貨バスケット制を採用した当初、ユーロのバスケット・ウエイトを10%に設定した。その後、2005年3月15日には20%に、同年5月16日には30%にまで引き上げた。さらに同年8月1日には35%に、同年12月2日には40%まで引き上げている。通貨当局は、バスケットの中身を貿易実態に沿ったものにするとしているため、バスケットに占めるユーロのウエイトは最終的に50%～70%程度まで上昇する可能性が高い。

さらに、現在米ドルが約70%、ユーロが約25%を占めるといわれる外貨準備についてもユーロ債の新規購入などを通じて米ドルからユーロへのシフトが進む可能性が高い。ドル安が進むと、外貨準備を米ドルで保有しているとその価値が目減りしてしまうためだ。将来的には、外貨準備も貿易取引の実態に対応するかたちで50%程度がユーロで構成されることになるだろう。

ロシアがユーロのバスケット・ウエイトを引き上げていく過程において、外国為替市場では少なからずドル安・ユーロ高圧力が生じるとみられる。